

琴歌譜難語考

—あきつはなふく・ふつきのをとり—

賀古明

琴歌譜所載の歌謡二十一首の内、十三首は、記・紀その他の古代古典中に類同歌が全く見出されないものである。それ故にまた、これらの歌謡の中には、他に類同例のない語句が含まれてをり、今日なほ、正解を得てゐないものがある。

今、これらの中、「継根振」(8)及び「庭立振」(9)の二曲中の語句についての私見を記し、歌意を述べ、御批判をいただきたく思ふ次第である。

○「はなふく」

つぎねふ やましろ川に あきつはなふく あきつはなふく
はなふとも あがはしものに 逢はずはやまじ 逢はずはやまじ
やまじ

これは「継根振」の譜中にみえる歌謡の文句であり、第四句目の所で一応切つて、第五句は、別行で書き出されてゐる。

なほ、譜の前に記されてゐる歌曲名の下に、細字二行書きで歌詞のみ記されてゐる所では、「あきつはなふく」と「逢はずはやまじ」との二句の繰返しは省略されて、六句形式の

歌謡として記してゐる。

この歌謡の文句の中、未解決の語句は、「はなふく」である。なほ「つぎねふ」も、また、未解決の語句ではあるが、古事記の歌謡中に、四例(58・59・62・64——岩波文庫本・記紀歌謡集番号、以下同じ)、日本書紀の歌謡中に、四例(53・54・57・58)、及び、万葉集に、一例(13・三三一四)あり、すべて「やましろ」にかかる枕詞とされてゐる。しかし、その語意については、古来諸説あり、その中、賀茂真淵が、「冠辞考」に、大和から山城へ行くには幾つも嶺を経て行くといふ意から「やましろ」にかかる(「次嶺経山背道乎」といつてゐる説が一応最も妥当性のある一説とみられるが、しかし、この万葉集の用字が、事後解の用字である危険性があり、なほ、完全な語解とはいへないものがある。ただ、この語は、ともかく枕詞となつてしまつてをり、今、この歌謡の内容には重要な意味をもつてゐるものではない。

「はなふく」は、当然「はなふ」と対応して考察されねばならない。

「はなふ」の同語例は、万葉集中にもあり、
 (1) 眉根搔き鼻。火紐解け待てりやも何時かも見むと恋ひ来し
 吾を
 11・二八〇八

の歌にみられるように、眉が自然にかゆくなくなつて来て、無意識に眉を搔くこと、思ひもよらずくしやみをする事、また、衣の紐がいつの間にか解けること、これらのことに、何か起る前兆を信じてゐた古代人は、特に、これらのことを、待人が来る予兆と結びつけて納得してゐたやうである。かうしたことは、今日の我々の日常生活の中でも、身辺になほ多くいはれてゐる場合がしばしばみられることである。この歌の左注に

「右は、上に柿本朝臣人麻呂の歌の中に見ゆ。但し、問答なるを以ちて、故累ねて茲に載す」

とあり、これは、同じく卷十一中の柿本朝臣人麻呂之歌集中の歌、

(2) 眉根搔き鼻。鳴紐解け待つらむや何時かも見むと念ふわが
 君
 11・二四〇八

を指すのである。この歌の心意の方向が、前記の歌とは、反対の方向に向つてゐる点以外は全くの類同歌である。

なほ、(1)の歌と「問答」になつてゐる歌、

(3) 今日なれば鼻。之々々。火眉痒み思ひしことは君にしありけり
 11・二八〇九

(なほ、この歌の第二句は、在来「ハナシハナヒシ」と

訓まれてゐたが、これは、誤字説による換字——字順の倒置による訓であるので従ひ得ないものである。武田祐吉博士は、原歌の字順のままに「ハナシハナシヒ」と訓むべきであるとされ、更に「ハナシは、鼻しで、しは強意の助詞。ハナシヒは目しひ、耳しひの例に同じく鼻の不通過であるのをいふと思はれる」(万葉集全註釈)といはれてゐるのは最も妥当な説である。今これに従ふ。)

即ち、鼻のつまることもまた、待人の来ることの予兆としてうけとられてゐたのであり、この歌は、その予兆による予感の通り待人が訪れて来たことを心からよろこんでゐる心情を表はしてゐる。つまり、思ひもかけず、正常でない状態が現れることに、すべてのことの前兆を感じとつてゐたといひ得るのである。なほ、

(4) うちゑまひ鼻乎。曾噓。鶴劍刀身に副ふ妹し思ひけらしも
 11・二六三七

(この第一句「晒」も在来「ウチハナヒ」と訓まれてゐるが、今、やはり、万葉集全註釈の訓義による。)

この歌は、おそらく旅にゐる男が、古里の女のことを思ひ、ふとはほゑんだ折に、思ひもよらず出たくしやみによつて、古里の女も自分のことをちようど今、心に思ひしのであること、この兆としてうけとつてゐるのである。ただ、この歌の場合、前兆でなく、遠く離れた所にゐる人の心が、今、自身自身の所にそのまま写つて来てゐると感じとつて、その事兆

を信じてゐるよろこびの姿である。

かうした予兆、また、事兆は、他にも多くみられ、わが夫子が来べき夕なり小竹が根の蜘蛛の行ひ今宵しるしも
尤恭紀

の歌のやうに、動物の行ひにも前兆を感じとつてゐる心は、また、万葉集に、

塩津山うち越え行けばわが乗れる馬ぞつまづく家恋ふらしも
3・三六五

妹が門出入の河の瀬をはやみわが馬つまづく家思ふらしも
7・一一九二

白細ににはふ信土の山川にわが馬なづむ家恋ふらしも
7・一一九二

木幡路は石踏む山のなくもがもわが待つ公が馬つまづくを

といふやうな、類想発想の歌をとどめてゐる。
11・二四二二

かくして、また「足占」(4・七三六、12・三〇〇六)「石占」

(3・四二〇)「路ゆき占」(11・二五〇七)「水占」(17・四〇二八)「夕占」(4・七三六、11・二五〇六、16・三八一一)など、

事物現象を通して予兆を求める、古代人の心には

布細布の枕動きて夜も寝ず思ふ人にも後も逢ふものを
11・二五二五

敷細の枕動きて寝ねらえず物思ふ此夕早も明けぬか
11・二五九三

と、身辺の「枕の動き」にも予兆を感じ、また

摺衣著りと夢見つうつつには誰しの人の言繁けむ
11・二六二二

と、「摺衣著る」夢見に事兆を見る。

まして、身辺の事物、事象よりも、自分自身の身に感ずる異常感に、驚き、よろこび、予兆また事兆を、強く感じとることはまた当然であらう。

「はなひ・はなふ」と同じやうに、「眉根搔き」の場合も月立ちてただ三日月の眉根搔き日長く恋ひし君に逢へるかも
6・九九三

眉根搔き下いぶかしみ思へるにいにしへ人を相見つるかも
11・二六一四

搔根搔き誰をか見むと思ひつつ日長く恋ひし妹に逢へるかも
11・二六一四、或本歌

眉根搔き下いぶかしみ念へりし妹が容儀を今日見つるかも
11・二六一四、一書歌

このように「眉根搔く」前兆がそのままに、現実となつて現れたよゝ結果に対するよろこびを表はしてゐる。しかし、また、暇なく人の眉根をいたづらに搔かしめつつも逢はぬ妹かも
4・五六二

いとのきて薄き眉根をいたづらに搔かしめにつつ逢はぬ人かも
6・九九三

と、前兆はただの予兆のみであつて、必ずしもそのままに予

期の通りのよい結果として現れないことを歎いてもゐる。

このやうな予兆のはずれは、

夜占聞ふわが袖に置く白露を公に見せむと取れば消につつ

11・二六八六

白細布のわが衣手に露は置けど妹は逢はさずたゆたひにし
て

11・二六九〇

と、衣の袖に置く白露も、ただ予兆のみにすぎず、白露のやうにはかない恋の兆は、待人を待つ間も待たず消えてゆくことが多かつたことであらう。

前兆は、いかにそれを信じようと、期待を抱いても、まことにこれは、ただ、過去の経験の類推の上に組み立てられた、自己に都合のよい側のみの仮想に立脚したものにすぎない。それは、必然の結果でなく、偶然の帰結の上に立つはかない俗信にすぎない。

「はなひ・はなふ」また「眉根搔く」などの前兆も、必ずしも、心たのしい期待に添ひ得、恋しい人に逢ひ得る結果ばかりをみちびき出してはくれなかつた。

当然、人の心は、靜的な期待の境域のみにとどまらず、前進的希求に転身する。

めづらしき君を見むとぞ左手の弓執る方の眉根搔きつれ

11・二五七五

ここに、積極的によい結果を希求する心意は、前兆を作意し、意識的によい結果の到来を促進しようとする意志の表示

「眉搔き」を人為的に工作するに至る。同様に、

真袖もち床うち払ひ君待つと居りし間に月かたぶきぬ

11・二六七七

……今更に公来まさめや さな葛後も逢はむと 慰むる心
を持ちて床うち払ひ 現には君には逢はず 夢にだにも逢
ふと見えこそ天の足り夜を

13・三二八〇

……愛しきよし妻の命も 明けくれば門に倚り立ち 衣手
を折りかへしつづ 夕されば床うち払ひ ぬばたまの黒髪
しきて いつしかと嘆かすらむぞ……

17・三九六二

と、床うち払ひ、袖折りかへし、袖片しき、黒髪しく行動に前兆・予兆的意義を意識し、期待の実現・よい結果の到来を、作意的に、積極的に招きよせようとする。しかもなほ、そのやうな他方本願的手段によつても、希求する結果の現れは、また、多くは得られなかつた場合もあらう。

しかし、なほ、かうした俗信による期待を心の内に持ちながら、一方、「はなふ」前兆が、待人に逢ひ得た、よい結果のみをもたらさなかつたことの実験の累積は、例へ、「はなふ」とも、そのみに心よせて、機の到来を待つことに心みたず、その偶然の幸のみ期待することの不安さは、更に、何としても人に逢はうとする、強い願望を促進し、それは「逢はずはやまじ」の心情表現をもたらすに至るは、また当然の帰結の一姿体である。

琴歌譜のこの歌の後半部は、かうした心意の強い表示とし

てうけとられるものである。

ここに、「はなふとも」(波奈布止毛)は、万葉集の「鼻火」(11・二八〇八)の「火」が乙類の字である故に、当然、「ハ行上二段動詞の終止形十逆態の助詞」の形であることはいふまでもない。ただし、上半部の「はなふく」(波奈布久)は、これとは別種の語である。

「続万葉集」では、この歌謡の「蜻蛉はなふく」について「蜻蛉が鼻息してゐる。よし蜻蛉は噓をしてゐようとも」と釈されてゐる。また「上代歌謡詳解」(木本通房氏著)には、「蜻蛉が鼻吹く様に飛んでゐます。よしさうした不吉な前兆がありましたも」

と釈して、なほ、その語釈の部に

「はなふく」とは、くさめをする事であるが、蜻蛉が飛んでゐる時に急に方向をかへる事かとも考へられるであらう。併しこれは、蜻蛉が水面に降りて来て鼻をつけて——水を飲むためであらうか——またすぐ飛ぶのをかう言つたのであるまいか」と記されてゐる。

しかし、既記の通り、「はなふく」は、「はなふ」とは、語法上からして、全く別の語であることは明かであり、これを「鼻息をする」または「くしやみをする」と釈すべき根拠は他に全く見出され得ない。しかし、前記引用の「上代歌謡詳

解」の語釈の部の後半に書かれてゐる、蜻蛉の飛ぶ様に関する推考は、この語の本質についてゐるものである。

「はなふく」(波奈布久)は、「はな」(鼻)と「ふく」とに分けてみるべきものであつて、この「ふく」は、古事記神代巻の伊邪那岐の命の黄泉訪問の段の終り近くの部分において、八の雷神・千五百の黄泉軍が追ひかけて来た時、伊邪那岐の命が「御佩せる十拳剣を抜きて、後手に布伎都都逃げませる」とあるところの「布伎」と同語である。

この「布伎都都」は、「振りつつ」の意であり、「布伎」の「伎」は、甲類の字であるので、当然、これは、カ行四段動詞の連用形である。したがつて、「布久」は、その終止形または連体形である故に、「波奈布久」は、「鼻振く」と解し得るものである。

かくて、この歌の上半部は、山城の川の水面を飛んでゐる蜻蛉が、突然に、水面に頭をつけては離れ、また、つけては離れて、その水を飲む姿態を、その実形そのままに写真描写したものとみられる。

したがつて、「蜻蛉はなふく」と、「はなふとも」との関連を、前者が後者の比喩であるとみることが妥当な解釈とはいひ得ない結果となる。

この歌謡における、前半部と、後半部とのつながりは、蜻蛉の動作そのものからではなく、蜻蛉の動作——その実形(それは必ずしも、現前の実景である必要はなく、以前に、

何時か見た経験の中に蔵されてゐる実景でもよいが、の把握表現としての「はなふく」の語句のひびきそのものからの類音連想により、「はなふ」の発想表現語が導き出されて来たにすぎず、後半部は、この「はなふ」——即ち、前兆としての自己の「くしやみする」ことを起点として、主情を抒情するものである。かかる発想の形式は、むしろ、古代民謡の発想表現の基本的形式の一つとして多くみられるものである。

なほ、「はなふとも」の「とも」が、仮想の逆態条件を表はず助詞である故に、この歌謡の後半部は

「よし蜻蛉は噓をしてゐようと、我が愛するものに会はないでは止まない」(続万葉集)

また

「よしさうした不吉な兆象がありまして我が愛する者に逢はないでは止みませまい」(上代歌謡詳解)

と釈されてをり、いづれも「はなふ」が好ましからざる状態の予兆——不吉の前兆としてうけとられ釈されてゐる。更に、「上代歌謡詳解」に

「何れにせよ、かうした何か蜻蛉の特殊な飛び方によつて、今日は女性に逢つては悪いと言ふ俗信が昔あつたのだと思ふ(衣通姫の『蜘蛛のよそほひ今宵しるしも』は、我背子が来べき兆象であつたが、蜻蛉の飛び方についても、男女の逢ふ事に関する種々の俗信があつたのではあるまいか)」

と説かれてゐる。しかし、蜻蛉の飛び方に関する俗信の推測のみから、ただちに「はなふ」を不吉の兆象とする結論を導き出すことは、安易にすぎる結論であり、むしろ甚だ危険な思考操作である。

少くとも、既記の用例からしても、「はなひ・はなふ」の語に、古代人が抱いた前兆性は、人に逢ひ得ることを予想し、よい結果を期待してゐるものである。ただ、時に、その予想・期待が、現実の結果としては、はずれて、更に、また、作意的に前兆を形成しようとしてきたことがあるとしても、基本的には、よき結実への方向を持つて考へ用ひられてをり、一つとして、不吉の前兆として意識してゐない。

しかし、なほ、前兆に対する期待の、結果としての崩壊の実体験は、前兆そのものに対する信依感を意識内に保有しながらも、更に意識的にその前兆感にさまたげられないで自己の意志の強力な遂行を希求するに至る。

ここに、「はなふとも」の句勢が、そのまますぐに次の句以下にかかり流れてゆくとのみみる、規範文法的解釈が、文意の眞の把握を不明瞭にしてゐるとみられる。

即ち、これは、この歌謡の最終句「逢はずはやまじ」のような強い語勢に対応するとき、助詞「とも」の「も」の有する並列性によつて、「とも」は、単に「はなふ」のみを受けただけでなく、その逆の状態「はなひず」をも、並列的に併せ含めて、受けとめ、最終句にかかり流れてゆく語意の幅を

保持してゐるものとみるべきである。

即ち、「はなふとも」は、真に、「はなふとも、はなひずとも——前兆があらうとも、前兆がなからうとも」の意を含有して、「我が愛し者に、逢はずはやまじ」と強い主情の表現に、抒情が集中表示された歌謡として享受されるべきものと考へるのである。(以上、昭和三十年八月稿、昭和三十一年三月補稿)

○ ふゝきのをとり

庭にたつ ふゝきのをとり しついついつら いとこせわがせ 暁と知らにわが寝ば しついついつら 打起せをとり

これは、「庭立振」(9)の譜の中にみえる歌謡の文句であり、歌曲名の下の歌詞との相違は、二つ目の「しついついつら」が、「しついつら」となつてゐる点のみである。

この歌謡の語句の内、正解を得てゐないものは、「ふゝきのをとり」及び「しついついつら」の二つである。

「ふゝき」は、「布々支」(歌曲名の下の歌詞)「布不伎」(譜中の歌詞)と書かれてをり、この用字中の、「布」と「不」、「支」と「伎」とは相通じて用ひられてゐるから同語とみることに支障がない。

更に、「ふゝき」(名詞)が格助詞「の」を伴つて、「をとり」(これを雄鳥とみることとは何ら問題がない。)の連体修飾格となつてゐることについては、在来、諸解同意見であつ

て、これにつき問題点はない。

ただ「ふゝき」の語意については、諸説あり、未定のままである。

佐佐木信綱博士は、「伎」の字をあてられ、「茨の雄鳥」と記してゐられるが、いかなる鳥のことであるかについては、解説されてゐない。(上代日本文学講座第四卷「琴歌譜について」春陽堂)

武田祐吉博士は、同じく、「茨の雄鳥」と書かれ、その口訳には、「露のそばの雄鳥」と釈されてゐる。(続万葉集)ただ、後には、「ふゝきの雄鳥」と清音になほされてゐる。(岩波文庫本、「神楽歌・催馬楽」中の琴歌譜)

なほ、高野辰之博士は、

「法吉(鶯の古名ならむ)の雄鳥」とされ、更に、また「しついついつら(鶯の鳴声をかたどりて囀詞とせしならむ)」(日本歌謡集成)

とし、「ふゝき」を、鶯と推定されてゐる。

「法吉」の名は、「出雲国風土記」の嶋根の郡の条に、「法吉の郷」の地名があり、その起源伝説として、

「神魂の命の御子宇武賀比比売の命、法吉鳥と化りて飛び度りて、この処に静り坐しき。故、法吉といふ」とある。更に、岩波文庫本「風土記」中の右の条の脚註に、

「法吉鳥——鶯であるといふ」

と記し、次いで、この「庭立振」の歌謡が証歌として引用さ

れてゐる。

この高野博士の説も、岩波文庫本「風土記」脚註の説も、共に、「箋注倭名類聚抄」中「鶯——宇久比須」の箋注中に「出雲風土記、法吉鳥、蓋し是、按ずるに、宇久比須、法吉、皆、其の鳴声なり」とあるに拠つてゐると思はれる。ただ、これより遡つての根拠は只今は見出されない。

右によつて、「法吉」を「鳴声」であるとする説を肯定するとすれば、「フ、キ」ではなく、「ホ、キ」——「ホ、キ」と訓まるべきであり、岩波文庫本「風土記」に「ホ、キ」と訓が附せられてゐることは妥当である。しかし、この脚註に、当然「フ、キ」以外には訓み得ぬ、この「庭立振」の歌が傍証として引用されてゐることは、當を得ない。

以上によつて「ふゝき」||「うぐひす」説は、今の所、成立しないことになる。

更に、木本通房氏(上代歌謡詳解)は、「ふゝきの雄鳥」の語釈について

「私は、これは鶏で、『ふゝき』は『笛吹き』と見た。即ち、鶏のときを作る声を笛吹くに譬へたとなすのである」と述べられてゐる。しかし、「ふゝき」の「え」の脱落とする説は、同じくこの歌謡の語の解説中に、同氏が、「いとこせ」を「いと起せ」の「お」の脱落と解説されてゐる場合と共に、一語中の独立母音の脱落といふ方法のみを以て語解

をすることは甚だ危険であり、他に同語例もしくは類用語例によつて確証され得ぬ場合は、無理な恣意解であるにすぎない。むしろ、木本氏の解意に添ふべくは、「ふゝき」(乱吹き・雪吹き)の強く吹きすさぶ音の印象を比喩に用ひて、勢よく鳴く雄鶏を修飾したとれば、考へ得る点もあるのではないかと思はれる。しかし、これにも、これを立証する他の同語例、類用語例は、ないので、一つの仮説にすぎないこととなる。

なほ、「箋注倭名類聚抄」の中に、「ふゝき」について、次の四種の「ふゝき」が記されてゐる。

「牛蒡」(宇末不々岐)

「蕨」(布々岐)

「款冬」(夜末布布岐)

「茨」(美豆布々岐)

この内、「牛蒡」については、

「本草に云ふ、悪実、一名牛蒡、博郎の反、岐太岐須、一に云字末不々岐、今按ずるに、俗に、房に作るは非なり」

とあり、その箋注中に、

「本草図経に云ふ、実は、蒲萄核に似て、褐色、外殻は、櫟核の如く、小にして刺多く、根の極大なる者有り、菜と作し茹れば尤も人を益す。」

「李時珍曰く、三月苗を生じ、茎を起し、高さもの三四尺、四月花を開き、叢となりて、淡紫色なり、実を結び楓

穂の如くにして小に、蓼上の細刺百千、之を攢簇し、一穂、子數十顆あり、其の根大なる者は、臂の如く、長者は、尺に近し、色は灰黪なり」

「按ずるに、其の葉、款冬に似て大なり、故に、馬款冬と名づくるなり、今俗に、牛蒡の音訛は、五房の如し」

とあり、これは、今日も、食用野菜に用ひてゐるゴボウであり、この問題には、かかはりが無いものである。

「落」については

「崔禹食經に云ふ、落は、音は路なり、布々岐と訓む、葉は葵に似て、円く広く、其の茎は煮て、之を噉ふべし」

とあり、その箋注中に、

「新撰字鏡、同訓なり、今省きて布岐と呼ぶ」

「按ずるに、落は、即ち、爾雅の顛凍之なり。郭の注、款冬なり、紫赤の華、水中に生ず」

「芸文類聚、呉普本草を引くに云ふ、款冬は、十二月、花、黄色なり、蓋し、其の花、いまだ舒べざる者は、紫赤、既にして、開けば、黄白なり」と謂ふ」

「本草の款冬、蘇の注に、葉は、葵に似て大なり、叢生し、花は根下より出づとは、是、以て布々岐に充つべし」とあり、これは、今日、食用にしているフキである。

「款冬」については、

「本草に云ふ、款冬、一名虎鬚、一本、冬は東に作る、夜末布布岐、一に云ふ夜末布岐」

とあり、その箋注中に、

「本草に云ふ、……(中略)……常山山谷及び上党水の傍、十一月花を採り陰乾す」

「蘇敬曰く、今、雍州南山の溪水及び華州の山谷澗の間に、出づ、葉は葵に似て大に、叢生し、花は根下より出づ、爾雅、菟葵、顛凍、郭璞の云ふ款凍なり、紫赤花水中より生ず、是皆、今、俗に布岐と呼ぶ、茎を取り菜と為す、花未だ舒べざる者呼んで布岐の塔と為す者なり」

とあり、「落」と「款冬」とは、同種のもので、菊科に属し、湿地に生じ、菊花状の花を持つ、今日のフキである。

「芡」については、

「爾雅の注に云ふ、芡音便美豆布々岐一名鷄頭、其の実は、鳥頭に似たり、故に、以て之を名づく」とあり、その箋注中に

「本草和名、鷄頭の実、和名は、美都布々岐乃美、枕冊子省きて、美豆布岐と云ふ。按ずるに、是、水中より生ず、葉、款冬に似たり、故に水款冬と名づく。今、俗に於爾波須と呼ぶ、蜀本図経に云ふ、葉は、大にして荷の如く、皺よりて刺あり、是、鬼荷の名を得たる所以なり」

「本草図経に云ふ、花下に実を結び、形は、鷄頭に類す、故に以て之を名づく、略々此れと同じなり」

「説文、芡、鷄頭なり、方言に同じ」

「蜀本図経に云ふ、此れ水中より生ず、花子拳大の如く、

形は鶏頭に似、実は榴の若く、皮は青黒、肉白く、麥米の若きなり」

とあり、これは、水中から生じ、葉は「落」「欽冬」に似てゐるが、花の下の実が鶏の頭に似てゐるので、一名鶏頭と名づけられてゐるものであり、これは、「落」「欽冬」とは別種のものである。したがつて、「落のそばの雄鳥」(続方葉集)との解は成立しなくなるわけである。

ここで、「ふゝき」の意の解に役立つ点は、前引用の箋注倭名類聚抄中の「芟」の解説中に、「芟」の花の下にある実が、鳥の頭に似てゐるので、これを、一名鶏頭と名づけられてゐるといふ条である。

ただ、また、「一名鶏頭」と記されてゐるために、箋注の中でも、これを鶏冠と混同し、今日でいふ「けいとう」と間違えてゐる、次のやうな説もあり、

「陶注云ふ、形上の花、鶏冠に似たり、故に鶏頭と名づく」
「本草和名に引く、上華、鶏冠に似たり故に以て之に名づけなす」

とあるのに対して、

「按ずるに陶の云ふ、華、鶏冠に似ると、此実は、鳥頭に似ると云ふべし、同じからず」

と、訂正を記し注意を促してゐる。

今日いふ「けいとう」(鶏冠——あかぎ垂目のひゆ科の *Celosia cristata* L.) は、帯化した花軸の上縁部が顕著な

鶏冠状を呈して、その下部の面に無数の細花が布生するので、夏から秋にかけて開き、赤・黄・白などの色があるものである。

しかるに、ここで今、問題にしてゐる「芟」(おにはす。一名みづき——ひつじぐさ垂目のひつじぐさ科の *Purpurex Sativa*) は、前記箋注中にも記されてゐる如く、池沼中に生ずる一年生の巨大な水草であり、刺の多い円柱形の長梗の上に、刺の多く生えてゐる球形(むしろ、卵形を立てて置いたやうな形)の実があり、この実の頂に四センチほどの一花がついてゐる。この萼裂片は四つに分れて開くが、未だそれが開かないでゐる中の形は緑色の嘴状をなしてをり、その下にある多刺の実と共に、あたかも鶏の頭部の形そのままである。同じく「けいとう」と呼ばれてゐるが、両者は全くの別種である。すなはち「ふゝきの雄鳥」は、「ふゝき」(芟)が一名「鶏頭」とよばれてゐた経路(芟の花実の部分が、鶏の頭部に似てゐる故に名づけられたといふ経路)を逆戻りして、「芟」の花実のやうな形をした頭の雄鳥——「ふゝきの雄鳥」(鶏)といふいひ方——表現をしてゐたとみることが、もつとも妥当であると考へるのである。

かく、「ふゝきの雄鳥」を雄鶏と解することによつて、「暁を知らにわが寝は」「打ち起せ」の部分と合意し、もつとも日常的な生活環境の中から歌ひ出されたもの——民謡として、なめらかにうけとられ得ると思ふ。

即ち、この歌謡が表はしてゐる全体の雰囲気は、古代社会の習俗の中に生きてゐた、若い男女が、一夜の逢う瀬をたのしく過しながらも、晝近くなれば、まだ人影もさだかでない薄暗がりの中へ、いとしい人を送り出さなければならぬ、もしまたさうしなければ、近隣の人々の噂がうるさくなり、そのため、これからの逢う瀬も苦しくなるかも知れない、そんな不幸を気づかふ女の気持を主題としてをり、もし私が明け方になつても気づかないで眠つてゐたならば、早起き鳥の、ふゝきの雄鳥(鶉)さんよ、私のだいじなあの方を起してあげておくれ、とたのんでゐる女の心づかひを表はしてゐる。それは、かぎりない幸福感に浸りながらも、一方にそれが断絶されることをひそかに恐れ、その幸ひの永続を願ふ人の強い願望の心情の姿を写し出してゐる。

これは、古代婚姻習俗の世界の中では、恐らくいくらでもあり得た風景の一つであらう。古代社会の中に生きた若い男女は、こんな気持を抱く場合にしばしばぶつかつて、夜明け前から、早く時をつくる鶏に、言葉さへ通じるならば、間違ひなくたたき起してもらいたい、ほんたうに頼みこみたい切迫した願望を持つたことであらう。かうした気持に対する共感を地盤として、この歌謡もまた、さうした若い人々の間に、次から次へと広く、さかんに口ずさまれ、歌ひ伝へられたのであらう。かうした民謡が、大歌の集である琴歌譜の中に記録されるに至つたことは、一面、このやうな民謡の持つ

生命力の強さをうかがはせるものであるともいへよう。

なほ、「しついつつら」については、単なる囃詞とする説(上代歌謡詳解)と、鳥の鳴き声とする説(日本歌謡集成)、更に、「しつ」は「し」(サ変動詞の連用形)と「つ」(完了の助動詞の終止形)とし、「いつら」は、疑問代名詞「どこ」とする説(統万葉集)の三つがある。しかし、この言葉は、今日、犬や、鶉などに呼びかけるとき(呼んだり、追いはらつたりする時)に用ひる「シッ、シッ、シッ」といふのに近いもの、「シッ、シッ、ドウシタンダ」とでも云ひかへたらばよいと思はれる、呼び掛けの語(感動詞)とみた方が妥当であると考へる。

なほ、「いつら」は、確かに、方角に関する疑問代名詞であるには相違ないが、しかし、実用例からみると、唯、疑問性を含んだ呼び掛の語(感動詞)として用ひられてゐる場合が多い。

この歌謡の歌譜には

「^シ之^重川^下字^下伊^上川^上字^下伊^川良^安並^安節」

「^し之^川字^下字^下伊^川字^上伊^川良^安並^安節」

(右の、筆者が附した読み仮名の内、平仮名は、歌詞。片仮名は、詠ふ折の延音。)

とあり、この詠ひ方によつても、鳥に対する呼びかけの語であることを証し得ると考へる。

(昭和三十年十一月稿・昭和三十一年三月補稿)(和洋女子大学教授)